

# 蚕糸絹業の国際比較分析

国際領域 上席主任研究官 河原昌一郎

講 師 杭州電子科技大学管理学院教授 範作氷氏  
日 時 平成25年8月20日(火) 午後2時~4時  
於 農林水産政策研究所セミナー室

蚕糸絹業は、シルクロードの例を引くまでもなく、古代から存在する世界的な伝統産業であり、明治以降の我が国の近代化を支えたのも生糸でした。このため、養蚕、生糸に特別な思いを抱く日本人は少なくありませんが、近年では、世界の生糸、絹製品の4分の3以上が中国で生産されるようになり、我が国での生産は極めてわずかなものとなりました。ただし、現在においても我が国が世界でも有数の生糸、絹製品の消費国であることは変わりありません。

中国以外の国では、インド、ブラジル、タイ、ベトナムといった新興国が蚕糸絹業の振興に取り組むようになってきました。また、中国国内でも産地が西部地区に移転していく等、経済事情の変化に伴って蚕糸絹業の産地も変化しています。

こうした中で、本セミナーでは、杭州電子科技大学管理学院教授の範作氷氏に最近の国際的な蚕糸絹業をめぐる情勢についてお話しをいただきました。範作氷氏は、日本留学中に長らく生糸産業の研究に携わってこられたこともあって、日本での知人も多く、今回は独立行政法人日本学術振興会「外国人研究者再招へい事業」で来日されたものです。本セミナーには、蚕糸絹業に関する研究者、事業者、行政関係者等の多くの方のご出席をいただきました。

以下でお話しのポイントをご紹介します。

## 1. 世界蚕糸生産の推移と特徴

世界の繭、生糸生産量は、第二次大戦後、1995年までは一貫して増加してきましたが、2000年にかけて一旦大きく下落し、その後は回復基調となったものの近年は再び伸び悩みの状況となっています。

たとえば、世界の繭生産量は、1950年代の生産量が約20万トンで、1995年には100万トン近くまで増加しましたが、2000年には60万トン程度にまで落ち込



杭州電子科技大学管理学院教授 範作氷(ハン・サクヒョウ)氏

み、近年の生産量は70万トン程度となっています。生糸生産量も同様で、1950年代に2万トン程度であったものが1995年には約11万トンにまで増加しましたが、2000年には8万トン弱にまで落ち込み、

近年は約12万トンの生産量となっています。

世界の繭、生糸生産量の国別構成も劇的に変化しました。

1950年代において、日本の繭生産量は世界の50%近くを占め、中国は20数%を占めるにすぎませんでしたが、1960年代から1990年代にかけて、日本が生産量を大きく減少させた一方で、中国は生産量を飛躍的に増加させ、2000年代からは中国が世界の繭生産量の70%以上を占める状態が続いています。2009年の世界繭生産量に占める各国の割合は中国75.47%、インド17.78%、独立国家共同体2.27%で、日本は0.04%を占めるにすぎません。

生糸生産量についてもまったく同様の推移をたどっています。1950年代に世界の約60%を占めていた日本の生産量は2009年には0.06%となり、その一方で、1950年代に約20%を占めるにすぎなかった中国は2009年には82.75%を占めるようになりました。

## 2. 世界各主産国のシルク生産と貿易

中国に次ぐシルクの主産国はインドです。インドの生糸生産量は約2万トンですが、政府の蚕糸業に対する積極的な資金投入もあって、品質の向上が見られるようになり、生産量も徐々に増えています。インドでは、衣服等でシルクを消費する伝統があ

り、生産量の約8割が国内で消費されています。インドからは原糸・絹織物、シルク服装等が主に輸出されており、輸出先は、アメリカ、西ヨーロッパ諸国、中東諸国が多くなっています。

ブラジルは、1990年代には1万トン以上の繭生産量がありましたが、近年では4,000トン程度にとどまっています。同様に生糸生産量もかつては2,000トン以上ありましたが、近年では1,000トンを下回っています。ブラジルの生糸は主に輸出用で、たとえば2009年において輸出向けは624トンでしたが、内需向けは56トンにすぎませんでした。生糸の主要な輸出先は日本であり、ブラジルの輸出生糸の約半分が日本に輸出されています。

日本は、2010年で見ますと53トンの生糸の国内生産量がありますが、輸入量は生糸732トン、絹糸978トン、絹織物944トン、二次製品7,980トンに及んでいます。二次製品の主なものは洋装類であり、二次製品の約8割を占めています。生糸、絹糸、絹織物の主な輸入先は中国で、2010年ではそれぞれ68.9%、59.3%、79.9%を占めています。

タイの繭生産量は近年では4,000トン強、生糸生産量は1,000トン弱です。タイのシルク輸出はアメリカ、ベルギー、日本の3カ国が多くなっており、タイのシルク輸出額のうち、この3国はそれぞれ、2012年で18.0%、13.1%、11.4%を占めています。

### 3. 中国蚕糸業の現状と直面する問題

中国は、近年では、繭生産量は約60万トン、生糸生産量は約10万トンを維持しており、世界最大の繭、生糸の生産国です。

また、中国のシルク商品は世界の130カ国（地域）に輸出されています。主な輸出先国は、アメリカ、インド、イタリア、日本であり、この4カ国で中国のシルク輸出総額の半分以上を占めています。

中国の蚕糸業は、2000年代の初めごろまでは浙江省、江蘇

省等の東部地区を中心として営まれていましたが、2000年代半ばごろからは蚕糸業の生産の中西部地区への移転が進むようになりました。これは、東部地区では、経済成長にともない、労賃がどんどん上昇したため、蚕糸業の生産コストが高騰し、東部地区の繭、生糸の価格競争力が失われるようになったからです。

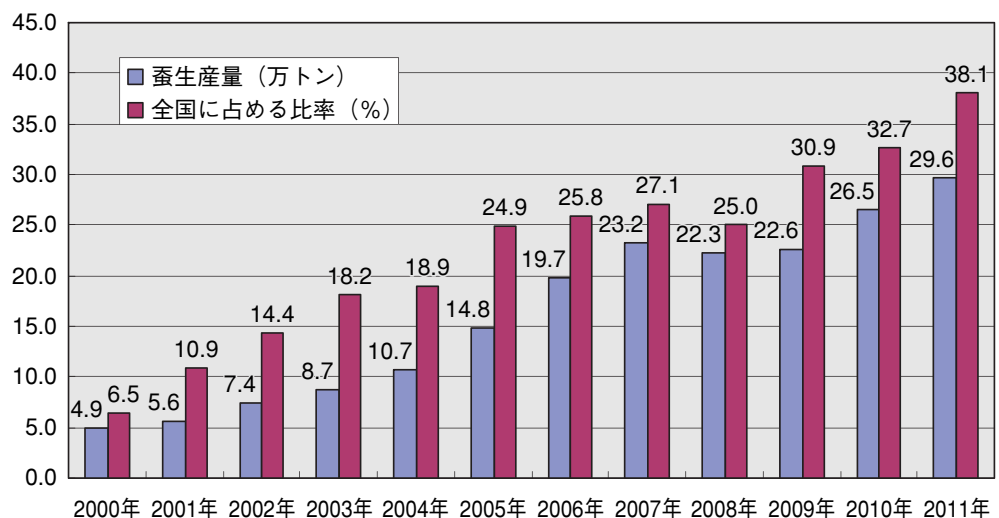
ところで、蚕糸業の中西部地区への移転は、これまで貧しかった中西部地区の農民の収入拡大に寄与するとともに、中国シルク産業の国際競争力を今後とも維持していく上で重要なことです。

このため、中国政府は、2006年から2010年までの5カ年の計画で、蚕糸業の中西部地区への移転を支援する「東桑西移」プロジェクトを実施しました。このプロジェクトによって、中西部地区では、良質繭生産基地の建設、シルク加工企業の誘致等が盛んに行われました。

「東桑西移」プロジェクトもあって、現在、中国の蚕糸業の新しい主産地として発展したのが広西自治区です。広西自治区の繭生産量の推移を第1図で示しましたが、広西自治区の繭生産量は、全国の4割近くを占めるようになっています。

### 4. 中国シルク産業の持続的発展の提言

今後の中国シルク産業の持続的発展には、①繭、生糸の品質向上、生産安定、②東部地区と中西部地区の連携強化、③蚕糸経営の大規模化、一体化、④国内需要および輸出の拡大、が必要なものと考えています。



第1図 2000-2011年の広西自治区の繭生産量と全国に占める比率

資料：範作永氏調べ。